



雑記抄

白昼夢

(?)

二月号の「いざ、発進!!」に次いで白中夢(白日夢)みたいな事を羅列して 何かの一考にもなればと…。

地元学：そこにあるものから始める「地元学」は、一九九〇年に水俣病で壊されてしまった地域コミュニティに対して地域の風土に根ざした暮らしから見つめ直し、

人と人、人と自然、地域の関係を再構築していこうと始められ、「地域楽」からふと洒落つけで「地元学」と名づけられたという。

- ① 水哲郎さんが当時提唱した進め方の要約)の手法には、例えば、
- ① 水のゆくえ↓自分の住んでいる身の回りのベースで、水の使い方には自分たちの暮らしが何につながってくるかを解明する
- ② 地域資源調査↓地元は土の人、外から見る人は風の人として、

「風に聞け、土に着け」を合言葉にし、情報とか感覚とかを共有する

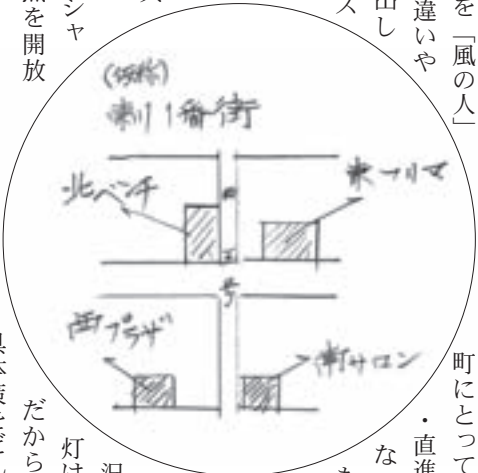
③ お嫁さん↓他所の土地から来られたお嫁さんを「風の人」ととらえて、違いや

感じを聞き出して、ライフスタイルの違いを再発見する

等々で、これらは町の自治振興にも。

東川一番街：シャッターの交差点を開放化するために

- ① 東フリマ↓フリーマーケットを、
 - ② 西プラザ↓広場として自由展示を、
 - ③ 南サロン↓スナックや待合所を、
 - ④ 北ベンチ↓季節に応じた出店やバーベキューを、
- 等々で。もちろん、金と人と時間



のクリアーが先決とはなるもの、これらは町の活性化にも。ルーラル・コミュニティ：その名の如く、田園の地域社会を構想した実現計画を樹立すべきと思われる。

ルーラルはアーバン(都会の、都市に住む)の対語というが、確かに旭川市のベッドタウン化やアクセスからの田園都市構想はわが町にとつてもなかなか直面的

・直進・直線とはならない今日的な課題もあろう。

にもかかわらず、全町的な宅地造成に基づく団地が形成されている現状からは、自立の灯は消えないはず。

だから、R・C計画は具体策をどんどん相互提示しながら、可能なところから発車したいものである。住民も町も。イベントの再検討：町・農協・各種団体等での実行委員会活動を総合的に再検討して見るのもどうだろうか。

- ① 氷まつりを雪と氷まつりとし、

雪あかりの路、雪像、水像そして雪中運動会などのウォーク・ラリーを、

② どんとこいまつり↓異世代交流の原点ともいえるべき行政区・町内会・グループ参加の催し物をバラエティに、自作品展コーナーなどを、

③ てっぺんまつりとアベックしたイベントができないだろうか。例えば東川物産展(センター・道草館などの出前展示)を、

④ 町民運動会を健康まつりや児童・生徒・学生親睦会、町民綱引大会などと共催して参加増員を、

⑤ キトウシ雪中体育会を開催し、雪と氷まつりで出来なかった時のカンジキ(スノーシューズ)運動会を、

等々で、世代別、グループ別の多様なイベントを正に全町的に再検討する。

言うは易く行うは難しではあるが、ひとつのアプローチとして、町の風の吹き方は、さて、どうだろうか。

(前)中央分館長
尾池隆男